Create the future

of their own as dermatologist



皮膚科専門医の活躍が求められています!

公益社団法人 日本皮膚科学会は、百年を超える歴史を持ち、全国各地の約1万人の 会貝によって組織されている公益社団法人です。その活動は、時代ごとに皮膚科医 療の課題と真摯に向き合い、研究し、診断・治療技術の発展に少なからざる貢献を してまいりました。21世紀に入り、皮膚科専門医に求められる課題は、ますます 多く、当会は「皮膚科のスペシャリスト」を目指す医師の入会を求めています。

公益社団法人 日本皮膚科学会

Japanese Dermatological Association

理事長 挨拶



高い専門性と多様性を 持つ皮膚科の魅力

公益社団法人日本皮膚科学会 理事長

天谷雅行

「皮膚」は全身を覆う最大の臓器です。皮膚科では、皮膚になんらかの異常があるすべての疾患がその診療対象となります。その中には、感染症、炎症性疾患、腫瘍、自己免疫疾患、遺伝性疾患、アレルギー性疾患、薬疹等、原因として様々な疾患が混在しています。その中から、皮疹を診て、診断を考え、治療法を組み立てていく、シャーロックホームズのような広い視野と深い洞察力が大切です。そして、診断から治療まで一貫して診療に携わることが可能です。

皮疹を一言で診ると言っても、何が違うのかわかりにくい面があると思います。しかし、ひとつひとつの皮疹はそれぞれ特徴的な所見を呈しています。この違いが分かるようになるためにはある一定の研修が必要ですが、一度分かるようになると高い専門性を持つことができます。しかも、目が見える限りはその経験を積み上げることができますので、現役

で活躍し続けられる年月も長いです。また、 皮疹を診る上で特別な技術に頼ることはあり ませんので、生涯、経験を積み上げることが できます。

「皮膚は全身の鏡」と言われますが、体の中で起こることを、内科的知識、外科的知識のようなマクロ的見方と、病理学的知識、生化学的知識のようなミクロ的見方を併せて考え、診療にあたります。皮膚科の中で、さらに高い専門性を考える上でも、皮膚病理学を極めたり、皮膚外科を極めたり、幅広い分野があります。自分の個性を生かし、自分の得意な分野をさらに伸ばしていくことができます。

疾患の病態解明が分子レベルまで進み、がん、炎症など、基本的なメカニズムは臓器ごとにあまり変わらないことが明らかになってきました。また、一細胞解析など、小さな生検検体から、多くの情報を得られる技術もでてきました。Big dataを解析するデータサイ



エンスも格段に進歩してきています。皮膚に限らず全身のあらゆるヒト疾患を解明する上で、皮膚を解析することで解明されることが格段に増えています。新しい科学が、皮膚という臓器を中心に展開する夜明け前とも言え、今後の発展が大きく期待されます。

皮膚科は、個人の事情に合わせてワークライフバランスをとりながら、一生高い専門性を持ち続け、医師として医療を社会に施すことができます。様々なライフイベントを、ペースを変えながら、プロフェッショナリズムを継続することができます。

皮膚科は、それぞれの個性を自由に伸ばす ことができるすばらしい専門領域です。医学 生、研修医の皆様が、皮膚科の魅力に気付き、 一緒に切磋琢磨できる日が来ることを楽しみ にしています。

Contents

理事長 挨拶	2
Chapter 1 皮膚科の診療領域、その魅力	4
Chapter 2 診療の現状と未来・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
Chapter 3 キャリア支援委員会としての取り組み・・・	8
Chapter 4 皮膚科専門医への道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	10
Message 先輩医師からのメッセージ · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	12
Leading Dermatologist 研究の現場から ·····	14
Leading Dermatologist 臨床の現場から ······	15

皮膚科の診療領域、その魅力

1.皮膚科は歴史的に、目に見える皮疹を診療領域としてきました

皮膚科は元来、目に見える皮疹をその診療対象としてきました。これは皮膚科では何故難解な漢字を疾患名に使っているかを理解する上で重要です。皮膚科を学ぶにあたって、最初に困難を感じるのは、疾患名が難解で見たこともない漢字を使っていることだと思います。例えば、「水疱型先天性魚鱗癬様紅皮症」という病名がありますが、これは水ぶくれを生じる(水疱型)、生まれつきの(先天性)、魚の"うろこ"に似たような(魚鱗癬様)紅斑が全身に広がっている病気(紅皮症)という意味です。当時は病気の原因が不明であったため、見た目そのままを病名にしたのです。特に皮膚の場合には、直接眼で見ることができたため、このように詳細な(今ではやや難解にも思えるような)病名となってしまったのです。当時、消化器内科でも内視鏡があれば、同じような難解な病名になったかも知れません。しかし、このように詳細に記載した病名に基づき、同様の症例を集めることによって、原因遺伝子がケラチンK1、K10であることが明らかになり、病態の理解が進みました。このように、皮膚科の疾患名は一見難解であるように見えますが、一旦理解できれば、病名からその疾患の重要な症状がわかるという利点があります。また、その詳細な記載に基づいて分類・解析がなされ、最終的には原因が解明され、病気が理解しやすくなってきていることも知っておいて欲しいと思います。

2.しかし、皮膚科は疾患の皮膚病変のみを取り扱う診療科ではありません

皮膚は人体最大の臓器であり、単なる外界からのバリア機能を担うだけではなく、代謝機能、免疫機能、内分泌機能など様々な生理機能を有しています。このような多彩な機能を背景として、皮膚にはアレルギー、膠原病、皮膚腫瘍、感染症、先天性疾患など多岐にわたる疾患が生じます。この多彩な疾患に対して、皮膚科医が一体どのような姿勢で診察に当たっているのでしょうか? 皆さんの中には、皮膚科は皮疹のみを取り扱う診療科と思っている方もいるかも知れません。しかし、皮膚科は疾患の皮疹のみを評価し、治療する診療科ではありません。例えば、膠原病の一つである皮膚筋炎では、皮疹と共に肺線維症や筋炎を来しますが、皮膚科は皮疹を診断・治療するだけではなく、場合によっては筋炎なども治療対象とします。従って、皮膚科は疾患の皮膚病変のみを取り扱う診療科ではなく、必要に応じて疾患全体を診る診療科です。

3.皮膚科は内科、外科、病理と広範囲な領域を扱う「皮膚の総合科学」です

前述のように、皮膚科がカバーする診療領域は広範囲になります。アトピー性皮膚炎や乾癬といった皮膚科固有の疾患のみならず、皮疹を伴う膠原病、感染症などといった内科的な疾患、さらには有棘細胞癌、悪性黒色腫に代表される皮膚悪性腫瘍に対する外科的な治療まで多彩な疾患をその守備範囲としています。皮膚科の特殊性として、皮膚科医自身が病理診断を行うことがあげられます。また、皮膚科の多様性は疾患のみならず、年齢層も多彩であり新生児から高齢者まで取り扱います。さらに、新しい皮膚科の分野として、美容皮膚科学や抗加齢皮膚科学が注目を集め、Quality of Lifeの向上に貢献しています。

皮疹は直接眼で見ることができるため、皮膚科の診療は視診、触診から始まり、診断の困難な場合には皮膚生検を施行し、前述の如く病理診断も自身で行うため、すべての診断プロセスを包括しています。例えば、胃癌はどの診療科で発見され、診断され、治療されるかを考えてみると皮膚科の独自性が理解できます。胃癌の多くは消化器内科で発見され、病理で最終診断がなされ、手術になる場合には消化器外科がその任に当たることになると思います。一方、悪性黒色腫を考えてみますと、これは皮膚科で発見され、病理診断も皮膚科医が行い(もちろん病理医と相談しながら)、手術も皮膚科で行われます。このように皮膚科は非常に幅広い総合科学といえます。

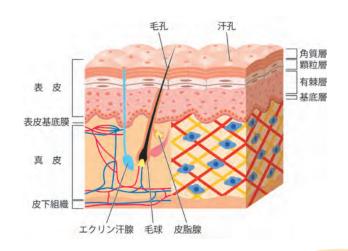
前述のように守備範囲の広い皮膚科では、内科、外科、病理を含めた幅広い診療技術や考え方が身に付きます。また、今何に興味があるのか分からない方でも、入局後に自分の興味のあることが必ず見つかります。



診療の現状と未来

一 現 状 一

皮膚に異常のあるすべての疾患が皮膚科の診療対象です



皮膚科では、皮膚になんらかの異常があるすべての疾患がその診療対象となります。その中には、感染症、炎症性疾患、腫瘍、自己免疫疾患、遺伝性疾患、アレルギー性疾患、薬疹等、原因として様々な疾患が混在しています。その中から、皮疹を診て、診断を考え、治療法を組み立てていく、シャーロックホームズのような広い視野と深い洞察力が大切です。

高い専門性を持つことができます

皮疹を一言で診ると言っても、何が違うのかわかりにくい面があると思います。しかし、ひとつひとつの皮疹はそれぞれ特徴的な所見を呈しています。この違いが分かるようになるためにはある一定の研修が必要ですが、一度分かるようになると高い専門性を持つことができます。しかも、目が見える限りはその経験を積み上げることができますので、現役で活躍し続けられる年月も長いです。

病理診断から、外科手術まで 幅広い分野を手がけます

「皮膚は全身の鏡」と言われますが、体の中で起こることを、内科的知識、外科的知識のようなマクロ的見方と、病理学的知識、生化学的知識のようなミクロ的見方を併せて考え、診療にあたります。皮膚科の中で、さらに高い専門性を考える上でも、皮膚病理学を極めたり、皮膚外科を極めたり、幅広い分野があります。自分の個性を生かし、自分の得意な分野をさらに伸ばしていくことができます。

Quality of Life を 高く保つことができます

皮膚科においては、診療対象の疾患の特徴から、自分の生活スタイルに適した、勤務体制をとることができます。医師として40年間のキャリアを想定した際に、集中する時期と、ゆっくりする時期があって当然と思います。それぞれの段階に合わせた勤務形体をとり、Quality of Lifeを高く保ちつつ、キャリアを長く続けることができます。

一 未 来 一

皮膚は研究材料の宝庫です

皮膚科には他の臓器と比べてたくさんの疾患が存在します。疾患の数が多い理由は、他の臓器 (例えば心臓とか肺)と比べて、簡単に生検して病理所見を検討したり、組織染色をしたりすることができるため、疾患の分類が進んでいるためです。しかも、まだ病因が分かっていない皮膚疾患が多数あります。皮膚は研究材料の宝庫であり、これから皮膚を対象とした研究により新しい展開があります。さらに、皮膚を研究することで、皮膚以外の臓器に応用できる様々な新しい発見があり、より普遍的な概念が生み出されてきます。これから益々皮膚科研究は発展し、多くの成果が生まれることが期待されています。

多様性を持つ専門集団です

皮膚科と言う領域が将来さらに発展する上で重要なことは、多様性を包含する集団であり続けることです。将来、どのような医療情勢、環境になるか誰にも分かりません。重症疾患を診る皮膚科医、研究をする皮膚科医、手術ができる皮膚科医、皮膚病理がわかる皮膚科医、美を追究する皮膚科医、様々な方向性を目指す多様性が必要です。皮膚科医一人一人がその多様性を担います。そして、多様性を持ち続けることが集団としての力になります。

世界的に最も人気のある診療科です

海外では、診療科毎に研修医、レジデントを採用できる数が決まっています。アメリカでも、ヨーロッパでも、アジアでも、皮膚科研修医のポジションを得るための競争は熾烈です。高い専門性、幅広い専門領域、Quality of Lifeを保てる、などがその人気の理由と思います。日本においても、将来的にこの波が押し寄せてくると思われます。

キャリア支援委員会としての取り組み

研修医、学生に向けた取り組み

~皮膚科サマースクール~

皮膚科サマースクールは、医学科の臨床実習や初期研修のローテーションの時間だけでは伝えきれない皮膚科学の幅広さと奥深さを分かりやすく解説するとともに、皮膚科は楽しさとやり甲斐に満ちた魅力ある診療科であることを若い人たちに伝えることを目的に企画されました。2016年と2017年は、山梨県小淵沢の大自然の中で、レクチャーやグループ対抗クイズなどを通じて、皮膚科の楽しさを共有できる1泊2日のセミナーとして開催します。皮膚科医のキャリアや研究の面白さも披露されます。お揃いのJDA特製スクラブ(持って帰れます!)を着用してエキスパートの手技を学べる皮膚外科のハンズオンもあり

執筆者:京都府立医科大学 加藤則人

ます。もちろん満天の星のもとでのバーベキュー・パー ティーは欠かせません。

アレルギー疾患、角化症、自己免疫疾患、色素異常症、悪性腫瘍、熱傷、感染症など、新生児から高齢者まで、皮膚や粘膜に病変が現れるさまざまな疾患を診る、忙しくも楽しい日々を送る皮膚のプロフェッショナルたちとともに、皮膚科の魅力を存分に分かち合える実り多い2日間になるよう、スタッフ一同が気持ちを一つにしてお待ちしております。皆さんにお会いできることを心から楽しみにしています。



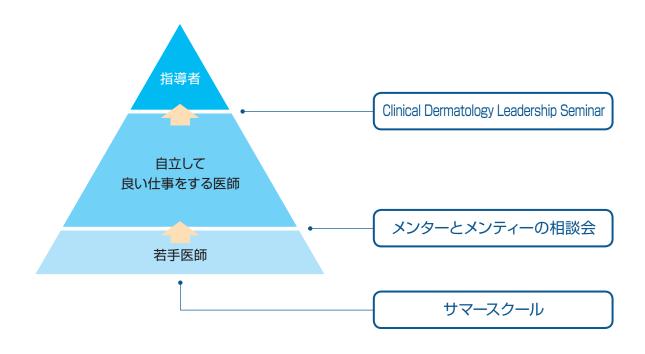
ダーモスコピー実習



豚皮を用いた皮膚外科実習



お揃いのスクラブで全員集合!



若手医師に向けた取り組み

~メンターとメンティーの相談会の紹介~

メンターとメンティーの相談会(M&M会)は、メンター (先輩医師)がメンティー(若手医師)の悩みや相談に応 じ、メンティーの成長を支援する制度です。総会及び全国 に4つある支部学術大会で定期開催しています。

誰しも仕事を続けていく上で、さまざまな困難に遭遇します。そんなときに、同じ道を歩んでいる先輩医師からアドバイスしてもらうことで、前に進めるようになることは少なくありません。皮膚科医としての知識や技能の向上のこと、専門医取得・大学院・留学などの進路のこと、職場の人間関係、育児や配偶者の転勤など、仕事に影響を与えるプライベートな悩みなどのいろいろな相談に、先輩医師が親身にこたえてくれます。メンターが、直属の上司ではないので悩みを打ち明けやすいのもよいところです。

M&M会は出会いの場でもあります。職場以外のところに 友人やメンターを持つことができ、ネットワークが広がっ ていきます。見守ってくれる人がいることは、大きな支え になります。

執筆者: 鹿児島大学

東

日本皮膚科学会は、社会で活躍する皮膚科医を育成するため、働きやすい環境を考え、キャリアをサポートする取り 組みを続けています。



M&M会の様子

専門医取得者に向けた取り組み

~皮膚科リーダー養成ワークショップ (現 Clinical Dermatology Leadership Seminar) の紹介~

執筆者:京都大学 松村由美

「女性医師支援」から「リーダー養成」へ

世界では、アンゲラ・メルケル氏、ヒラリー・クリントン氏、蔡英文氏ら女性のリーダーが活躍しています。日本では「202030*」という目標が掲げられていますが、達成はほぼ絶望的です。

「皮膚科の女性医師を考える会」が実施したアンケート (JDA letter 2009年9月20日) から、入局後5~10 年までに女性医師の7割が医局を辞めていることが分かりました。女性医師の離職問題はたしかに問題です。しかし、問題解決の対象は、実は「女性医師」ではなく、人材を育成する立場の「リーダー」ではないかと考えました。よきリーダーが育てば、女性も含め、部下がやりがいをもつのではないかと考えたわけです。そのことが、結果的に女性医師の離職率を低下させるのではないかと仮説を立てました。そこで委員会名称を「皮膚科の女性医師を考える会」から「キャリア支援委員会」に変更し、「女性支援」から「リーダー養成」に舵をきりました。

リーダーに必要なコミュニケーションスキル

利用できる時間に制限のある多忙なひとこそがリーダーになればよいのです。子育て中の(女性)医師がリーダーになれば、時間の有効活用に努め、チームの士気を高めます。ただし、組織変革の途上では、チーム内に軋轢が生まれることがあります。軋轢の解決もリーダーの任務です。そのためには正確な状況モニターやコミュニケーションスキルが必要になります。リーダー養成ワークショップでは理論や実践に裏付けられたこれらのスキルを学びます。皮膚科専門医を取得した医師が次の高い目標「ひとを育てる」に向かうための2日間の濃厚なワークショップを展開しています。



フットケアハンズオンの 受講風景

※ 202030とは

2020 年までに、あらゆる分野において、指導的地位に女性が占める割合を 少なくとも 30%にするという政府目標

皮膚科専門医への道

2018年から日本専門医機構による専門医制度が開始され、厚生労働大臣の管轄・指導の下、公的な資格として認定される専門医となりました(図1)。

皮膚科診療には数多くの炎症性疾患、腫瘍性疾患などに対し病理診断、内科的治療、外科的治療が必要であり、修得すべきものは多岐にわたりますが、他領域より長い5年間の研修で漏れのない知識、技能、態度を修得します。研修は研修基幹施設が策定した研修プログラムに則り、基幹施設と連携施設をローテートすることによって到達目標の達成を目指します(表1)。専攻医は日本皮膚科学会のホー

ムページにある専攻医研修管理システムで経験症例の登録、研修の自己評価を行い、指導医がそれらを確認、評価してゆく形で研修が進められます。必要な単位を取得後(表2)、研修修了見込みの時点で専門医試験の受験ができ、研修修了と同時に専門医を取得することが可能です(図2)。また、大学院進学も専門医取得に不利にならないように配慮されています。必要に応じてサブスペシャリティー専門医の取得が可能ですが、皮膚科は基本領域専門医だけで十分な専門性と実力を兼ね備えた医師となることができます。

図 1. 機構認定専門医制度

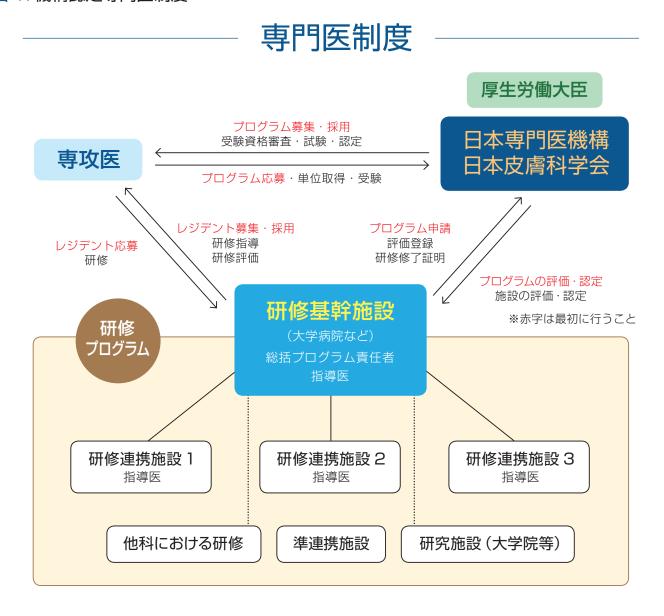


表 1. 研修プログラムの例

コース	研修1年目	研修2年目	研修3年目	研修4年目	研修5年目
A 基本コース	基幹	基幹	連携	連携	基幹
B 連携施設中心コース	基幹	連携	連携	連携	基幹
C 社会人大学院コース	基幹	基幹(社会人大学院)	連携(社会人大学院)	基幹(社会人大学院)	基幹(社会人大学院)
D 大学院在学中に 受験するコース	基幹	連携	大学院 (研究)	大学院 (研究)	大学院 (臨床)

基幹:研修基幹施設での研修(最低1年必要)。 連携:研修連携施設での研修(最低1年必要)。

大学院(研究):基礎医学の講座などで研究に専念する期間(2年間まで)。 大学院(臨床):皮膚科を研修しながら研究をする期間(制限無し)。

表 2. 皮膚科専門医研修修了要件概略

- 1)5年間以上の研修期間を満たしていること。
- 2)研修の記録により、専門知識や技能などの形成的評価、経験症例の確認、年次総合評価を受けていること。
- 3) 15症例の経験症例レポートを記載し、指導医の確認を受けていること。
- 4) 10例の手術症例レポートを記載し、指導医の確認を受けていること。
- 5)皮膚科領域研修委員会が規定する単位を取得すること。

(講習会単位:32単位まで、学術業績単位(学会発表・論文):28単位以上で合計60単位以上)

図 2. 皮膚科専門医へのロードマップ (例)



先輩医師からのメッセージ

世界につながる皮膚科学

氏家英之



皮膚疾患は目に見える病気です。患者さん自身も自分の 皮疹を見ることができます。しかし、目に見えているにも かかわらず、ほとんどの医師は皮疹を正しく診断すること ができません。私が学生だった頃、皮疹をみて素早く鑑別 診断を列挙し、治療方針を立てていく皮膚科医の姿に感銘 を受けました。また、皮膚疾患の適切な診断・治療には内 科的知識や外科的技術、病理診断能力を駆使しなければな りません。このような学問の幅広さと高度な専門性に魅力 を感じ、皮膚科を選択しました。

最初の数年は皮疹をみても鑑別診断が思い浮かばず、自分が皮膚科医であると名乗るのが恥ずかしいような状況でしたが、経験を積むことで徐々に皮疹が「見える」ように

なりました。ある程度診療に余裕が出てくると、今度はその病態が気になるようになり、研究に興味を持ちました。 皮膚科領域には、病態が解明されていない疾患が無数にあります。あなたが見つけた興味深い知見は、世界初の発見である可能性が十分にあります。そしてその発見は世界中の思いもよらないところまで知れ渡り、多くの人達の役にたつ可能性を秘めています。

皮膚疾患はアレルギーや感染症、悪性腫瘍、遺伝性疾患など多岐にわたります。医師として患者さんの役に立つことができるのはもちろん、学問としての魅力も大きく、やりがいのある分野です。皮膚科に少しでも興味のある方には、ぜひその醍醐味を味わっていただきたいと思います!

臨床も研究も楽しめる皮膚科

中村洸樹



学生時代から免疫という現象に興味を持っていた私は、 臨床や研究の両面で免疫に触れられる科として皮膚科を選択しました。手を動かすことも好きだったので、創傷処置 や手術など、外科的操作ができることも魅力的でした。

現在、大学病院では、膠原病と乾癬の2つをサブスペシャリティとして、専門性の高い診療をしています。近年、生物学的製剤などの新規治療の発展は目覚ましく、多くの皮膚疾患に適用が広がっています。免疫をピンポイントで治療する、そういった最先端の医療に従事できるのも皮膚科の醍醐味です。

この他、一般病院やクリニックの外来でも、幅広い疾患を経験しています。若い学年で一人立ちできるのは皮膚科の良いところです。見た目、手触り、温度、臭い。五感を

使って当たりをつけ、ダーモスコピーや顕微鏡、血液検査、病理検査をし、外用薬や内服薬に対する反応性も加味した上で、総合的な診断をする。内科とは一味違った推理が楽しめます。

大学院では、臨床検体やモデルマウスを使い、皮膚を含む各種臓器の免疫異常や血管障害などを調べています。将来、臨床に還元できるような研究をすることが目標です。

皮膚科は、皮膚に症状が出る全ての病気を扱います。臨床、研究どちらも守備範囲は広く、決して飽きることはないでしょう。そして、他科の医師からも頼りにされ、患者さんからも感謝されます。皆さんも、やりがいのある皮膚科で働いてみませんか。

皮膚科の魅力

山賀康右 大阪大学



私は中高校生の時分にニキビに悩まされておりました。 そしてまた小さな頃から「ハゲたくない。なんとかハゲない方法は見つからないか」と思って過ごしておりました。 医学部に入った当初は、特に将来従事したい診療科はなかったのですが、3-4回生の頃に座瘡も脱毛症も共に皮膚科で扱っているということを知り、それ以後皮膚科医を志すようになりました。皮膚科には、多くの魅力があります。

まず、皮膚科学の領域には、ハゲやニキビだけでなく、かぶれや日焼け、虫刺され、じんましん、とびひなど一般の方々にも馴染みのあるものが多くあります。若い研修医の先生方や学生の方々も、ひとつぐらいは皮膚症状のご経験があるのでは無いでしょうか?ご経験があるのは大きな強みとなります。患者さんの訴えに、より深く共感できるようになります。

そして、多くの皮膚疾患は直接目で見え、触れられます。それゆえ、詳細にそして時間を追いながら病変を捉えられます。それが皮膚科の醍醐味です。診断技術が進んだ

現代であっても、これは大きな魅力となります。

さて、皮膚科はQuality of Lifeの高い科であるとよく言われますが、実際のところどうなのでしょうか? 私はその通りだと思います。初期研修で他科も経験しましたが、他科と比べると緊急時の頻度も高くないですし、それゆえに自分の時間を持ちやすいです。この自分の時間をどのように使うかは貴方次第です。私は現在、診療のかたわら、大学院生として細胞接着装置のひとつである、タイトジャンクションの研究を行っています。先月には、アメリカの学会で発表をさせて頂いて、海外の先生方と交流を持つ事が出来ました。

最後に日本国外では、皮膚科は最も人気のある科のひと つです。なかなか皮膚科医になりたくてもなれないようで す。この事が皮膚科の魅力を物語っています。今後日本で もそのようになるかもしれません。皆さんも皮膚科で充実 した医師生活を送ってみませんか?

皮膚科の可能性は無限大∞

千貫祐子 島根大学



私が皮膚科医になってから、早20年が経過しました。 20年が経過しても、今日はどんな新しい疾患に出会える だろう、どんな新しい発見があるだろう、と、ドキドキワ クワクしながら毎日を過ごしています。皮膚科の担当する 疾患は数限りなく、悪性腫瘍、良性腫瘍から始まり、自己 免疫性疾患、アレルギー性疾患、感染症など、その守備範 囲は留まるところを知りません。充実感はありますが、実 は今のところ何年経っても全てを十分やり遂げた、という 実感は持てていません。逆に言えば、何年経っても全く飽 きることがなく、日々興味深く診療に取り組める科なので す。そして一生懸命診療すればするほど、「この疾患の病 態は一体どうなっているのだろう?」「どうしたらこの患者さんを救えるだろう?」という疑問が生まれ、私はその解明のために35歳で大学院博士課程に入学しました(41歳で卒業しています)。皮膚科は、卒後間もなくはもちろんですが、何年経っても、何歳になっても、やる気さえあれば素晴らしいお仕事ができる、無限大の可能性を秘めた診療科なのです。悪性腫瘍や重症感染症、自己免疫性疾患やアレルギー性疾患(重症薬疹やアナフィラキシーショック)など、私達の救える命は無限大です。皆さんも、診療や研究における皮膚科の無限大の可能性を一緒に経験してみませんか?

From the actual research site

~ 研究の現場から ~

長い人生だし、新しい夢を 追ってみてもいいんじゃない?

椛島健治 京都大学



おそらく多くの方は、研究は堅苦しいもので、自分とは あまり縁がないと思っているのではないでしょうか?そし て、一流の医師になるためには、臨床に打ち込むことが一 番であると考えていませんか?

私たちは、苦しむ患者さんを救いたいという思いをもって 医師の道に進んだ訳ですが、実際の医療現場はわからないこ とだらけで治療法も限られているという現実に直面します。

医師になるまでに私たちが行ってきた勉強は、ページをめくれば答えが載っているような問題集に頼ってきましたが、これから私たちが直面する問題には、答えがあるのかどうかすらわかりません。また、医学の進歩と共に、生物学的製剤などの新たな薬剤も導入されてきています。各対象疾患の病態や薬剤の作用機序を正しく理解しなければ、効果の判定や副作用の予想が難しいという時代に突入しました。

そうなると、医学の真理や高度な医療を追求する術は、 臨床だけではなくなります。また、大量の情報が溢れる 中、各情報の信憑を正しく判断する審美眼も必要になりま す。それらの実現のためには「サイエンス(研究)を経験 することで養われる効用」を無視できなくなりました。

そしてサイエンスは一部の人のためにのみ存在するのではありません。子供の目をみると好奇心に満ちあふれています。ところが私たちはいつしかその気持ちを失ってきました。一方、なんとか患者さんを助けたいと思って臨床をやっていると、「もしかしたらこの薬が効くかもしれない」とか、「この疾患の病態はこういうことかも知れない」とかに「この疾患の病態はこういうことかも知れない」などという思いがわき出してくることがあると思います。その思いは子供の好奇心の目と通じるものがあります。このまから生まれてくる自分の疑問を私たちはもっと大切にするべきではないでしょうか?

たしかにかつて(10年以上前)の研究は、手技の習得が大変でした。しかし今は、多くの方法が簡略化され、研究というものがとても身近なものとなっています。これか

らのサイエンスは、どのような疑問をもつのかがより重要となります。どういうわけか、皮膚科は大学を越えた繋がりが密で風通しがいいのが特徴です。ですから、どの大学の医局に所属しようが、解決に向けたチャンスは必ず存在します。

研究は登山のようなもので、天気が悪いときは頂上が見えませんが、それでもこつこつと足を前に進めます。それにルートは一つとは限りません。時に道に迷ったり、雷雨に見舞われたりする事もありますが、頂上に着いたときの爽快感は、登った人にしかわかりません。

皮膚は、サイエンスの対象として魅力に満ちあふれています。そもそも私たちは、人間をみるときに、実は皮膚をみているのです。「落ち込んでいる」とか「嬉しそう」といった表現も皮膚を介して行っています。従って、皮膚は、我々の好奇心や疑問の直接の対象物だと言えます。自分の肌を30分でもいいのでじっと眺めてみてください。シミ、シワ、外傷後の瘢痕、血管腫などの自分の人生が刻み込まれています。

医者としての人生は約40年もあります。その一部の期間をサイエンスに身を置くことは、残りの医師としての考え方の多様性を拡大すると確信しています。



From the clinical site

~ 臨床の現場から ~

皮膚科の守備範囲は広い!

五十嵐敦之 NTT 東日本関東病院



「皮膚は内臓の鏡」という言葉を皆さんどこかで耳にしたことがあるかと思います。実際、皮膚症状から糖尿病などの内分泌疾患や膠原病、血液疾患、ひいては内臓悪性腫瘍などが発見されることは決してめずらしくはありません。医学生時代、先輩皮膚科医から聞いた「皮膚科医は手のひらを見ただけで全身性エリテマトーデスを診断できる」という一言に驚きと懐疑心を抱いた記憶がありますが、皮膚科を専攻してきた半生を振り返ってみて、この言葉は正しいと断言できます。手間のかかる検査を経ずに皮疹を一目見ただけで診断でき、ひいては患者さんの生活歴までも類推できるところが皮膚科の醍醐味のひとつであると感じています。

皮膚科の取り扱う疾患は接触皮膚炎、アトピー性皮膚炎、ざ瘡、真菌症、乾癬はもとより、膠原病や水疱症などの自己免疫疾患、さらに皮膚腫瘍や母斑症、熱傷などの外科的治療を要する疾患まで多岐にわたり、守備範囲が広いのが皮膚科の特徴です。最近では下肢静脈瘤を扱う施設も増えつつあります。皮膚科は内科的なことも外科的なこともできる誠にやりがいの多い診療科であるといえます。このように広い分野を扱う皮膚科の中で自分の興味が湧く、専門として進みたい領域は必ず見つかると思います。

将来は研究職を、と考えている方もおられると思います。そこで申し上げたいのは、研究の道に進むとしても臨床経験を積んでおくことがその後のキャリアアップにつながるという点です。研究で大切なのは真実の解明とともに診断法や治療法の開発など臨床現場へのフィートバックと考えますが、そのような研究が行えるようになるためには

臨床を良く知っておかなければなりません。臨床を経験し現場でのニーズがどういうところにあるのかを知ることによってこそ、研究のアイデアも浮かぶというものです。

また、いわゆるcommon diseaseを誤診しないことは 大変重要ですが、これは結構難しいことであると日々思っ ています。湿疹ひとつとっても臨床像に幅がありますから、標準像からどの程度かけ離れているのか、多くの症 例を経験して理解しておくことが正しい診断を下すために は必要です。さらには遭遇する疾患を一つ一つしっかりと 学習しつくして自分のものとし、次にその疾患をみたとき に標準レベルの対処ができるようにしておくことも大切で す。臨床ができればこの道はいくらでも生きていけます。 いっしょに皮膚科の道を歩んでみませんか?



主な事業活動



- (A) 研究・発表・広報活動『日本皮膚科学会雑誌』の発行『The Journal of Dermatology』の発行
- B 皮膚科専門医の養成と研修
- ⓒ 学術大会・地方会の開催
- ① 囲内連係事業、「ひふの日」の啓蒙・啓発
- **E** 国際交流事業

公益社団法人 日本皮膚科学会

Japanese Dermatological Association

〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-4

TEL: 03-3811-5099 FAX: 03-3812-6790 URL: https://www.dermatol.or.jp E-mail: gakkai@dermatol.or.jp